

Title	EKD 社会科学研究所長 GerhardWegner 氏を迎えて：大木英夫所長は語る(総合研究所 News)
Author(s)	聖学院大学総合研究所
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-2 : 43-45
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2425
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

EKD 社会科学研究所長
Gerhard Wegner 氏を迎えて
大木英夫所長は語る

ドイツのプロテスタント最大教派である、ドイツ福音主義教会（EKD）の社会科学研究所Gerhard Wegner所長が上海万博に参加した帰路、7月20日《火》、東京に立ち寄り、総合研究所、大木英夫所長を訪問し、日本とドイツのキリスト教会の歴史と現状などを懇談した。

EKDは、芸術、教会建築、礼拝、教会法、宗教教育など15の研究所をもっているが、そのなかで唯一社会科学系の研究所として、Wegner氏が所長を務める社会科学研究所がある。

社会科学研究所は、主として教会および宗教社会学、また経済政策、社会政策の領域で、社会科学、社会倫理的研究を行ない、教会運営について助言することがその役割となっている。

以下は、当日の大木英夫所長がWegner所長に語った内容のメモである。

1) 日本におけるキリスト教の影響について

日本にキリスト教が入ったのは、まず17世紀の大航海時代に、カトリックのイエズス会の伝道であった。それは迫害、殉教、そして聖人に列せられるという感動的な歴史を残している。プロテスタント・キリスト教が入ったのは、明治維新(1868年)前後からである。明治維新は近代日本への転換であった。その頃は主としてアメリカからのプロテスタント・ミッションが入った。

2) 近代日本の形成に対するドイツの影響

明治維新から22年後、日本ははじめて近代的憲法「大日本帝国憲法」(1889年)を制定した。それはプロイセン憲法をモデルとしたものであった。近代日本は基本的にドイツの影響を深く受けてきた。ドイツの諸学の影響を受けた。たとえば医学では、カルテをドイツ語で書いた(いまはそうではないが)。哲学は圧倒的にドイツの影響を受けた。その傾向は、神学においても同じである。German Captivityと名づけた傾向が生まれた。

3) 東アジアの状況

日本がアジアの中で一番早く西欧化し、「脱亜入欧」(福沢諭吉)をめざした。やがて日本はヨーロッパの帝国主義を模倣し軍国主義となり、日清(1894年)、日露(1904年)のふたつの戦争に勝利し、その間1902年には日英同盟を結び、世界の大国の中に登場した。日韓併合1910年(ことし100年目)にいたる。

1914年から1918年の第一次世界大戦には、日本は英仏米側にいて戦勝国となった。新しくできた国際連盟では常任理事国となった。——第一次世界大戦のときには青島を占領し、ドイツ兵を捕虜として四国の徳島につれてきた。その捕虜収容所では第九交響曲の日本最初の演奏がなされた。また会津出身の収容所長の捕虜に対する寛大な取り扱いには有名である。——

日本を盟主として大(汎)アジア主義、大ドイツ主義(Grossdeutsche Loesung)のような考え方、大東亜共栄圏を唱える。内実はしかし大日本帝国主義となる。

4) 日本国憲法の成立

1946年に大日本帝国憲法が廃止され、日本国憲法が成立する。新しい憲法は比較的最近でもアメリカの「押し付け憲法」といわれた。しかしその「押し付け憲法」は一字一句も変えられることなく、今日までデモクラシーを受け入れた日本に定着している。戦後日本が、ひろく平和主義、反戦的であることは事実、それは今日の世界の現実から遊離しているほどに日本の現実である。

5) 日本の知的世界には、ドイツの影響は残った。共産主義の文献は、ロシア語で読まれるよりはドイツ語で読まれた。哲学、神学にそれは顕著にのこった。わたしはそれを揶揄してゲルマン捕囚(de captiuitate Babilonica ecclesiae)と呼んだ。それはしかし、もう終わった。それはこれから新しい日独のキリスト教神学と教会の関係がはじまるべきである。それは上富坂のドイツ福音教会のやり方ではない新しい関係づくりである。

6) 新しい関係作りとは何か?

それはベルリンの壁の崩壊後現われた世界の新しい状況へのキリスト教的リーダーシップの神学的定義を明確にすることである。

第一次大戦後、ドイツにはハイデガーの実存論的な存在論がでた。しかし、それは第二次世界大戦を経て大きく変化しつつある世界と取り組む哲学ではなかった。

戦後、社会学の台頭があった。日本では第一次大戦後のヴェーバー研究が盛んであった。それは歴史学と社会学の結合であった。しかしそれは第二次大戦後では、大きく発展させられねばならないと思う。というのはいま世界がある、実存とは何か、について神学的にどう捉えるかという課題があるからである。ハイデガーは世界wertをweltenするといった。しかしそれを十分に展開していない、ハイデガーの哲学は、所詮、プーバーが指摘したように「実存の小部屋」を覗き見ている哲学だからである。

8) グローバリゼーションの現実を捉える神学

グローバリゼーションとは、グローブが球形から変形していくことである。球の円環が直線化していくことである。世界が河の流れのように変化して流れていくことである。そこに終末論的展望

が開けてくる。それはアウグスティヌスのDe civitate Deiの世界史展望が開けるであろう。中世のトマスの構図ではない。教会は世界史と問いと取り組まなければならない。ハイデガーのいう「存在」と「時間」は、グローバリゼーションという現代の人間にかかわる地球的、宇宙的な現実を捉えることができない。

それは人間が神のごとくなるということではない。そうではなく、聖書が証ししている神が、現代のグローバリゼーションという世界史的現実との関わりで捉える新しい神学の台頭ということである。それは、わたしが『日本の神学』で言い出したものである。それは日本を世界史的コンテキストにおいて神学的に捉えることである。

9) 日本の教会の衰退とその原因

日本の教会は、第一次大戦後のゲルマン捕囚、それによって歴史の速い流れに遅れをとった。他方日本では自然科学は進んだ。アジアでノーベル科学賞を最も多く受けている国である。しかし、神学・哲学の遅れにより、日本ではさらに前進を続けるグローバリゼーションを正しく捉えることができないでいる。20世紀の実存主義で失われたのは、世界史的、社会的展望である。「我 - 汝」ということ横軸を垂直に建て直し、「天にいますわたしたちの父よ」と祈ることにより、そこで開ける新しい水平次元は過去から未来まで展望できるようになる。グローバリゼーションは、Heilsgeschichteになりたがっている！



EKD社会科学研究所長 Gerhard Wegner氏